# 砥石線遺跡

～町道米岡奥尻空港線造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～

平成13年度

奥尻町教育委員会

# 例　　言

1. 本書は“米岡奥尻空港線造成工事”に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書は木村哲朗が編集し、執筆は第Ⅱ章３節及び第Ⅲ章２節が天方博章が、ほかは木村が担当した。
3. 発掘作業は以下のものが従事した。
   赤平　清子　　天方　郁代　　天内　千秋　　荒谷　恵子　　大崎恵美子　　小黒　敏光
   蛎崎　美子　　工藤　竹美　　近藤美佐子　　白川　恵子　　新谷　光広　　末廣可奈子
   高田こと子　　高田サキノ　　竹田　昭児　　手塚　芳子　　中澤　一夫　　増田やす子
   三浦　京子　　山口　則子
4. 整理作業の分担は以下の通りである。
   土器拓本等：天内千秋・工藤竹美・近藤美佐子
   石器実測・トレース：天方博章・天方郁代・大崎恵美子・新谷光広・津山千尋・山口則子
   写真撮影・現像：中澤一夫
5. 調査を進めるにあたり下記の機関、人々よりご指導、ご助言をいただいた。
   田才雅彦　　土田秀夫

# 凡　　例

1. 本書の略語は以下のように用いた。
   (1) 土層断面図
   駒ヶ岳起源の火山灰：Ｋｏ－ｄ，白頭山－苫小牧起源の火山灰：ＢＴ－ｍ
2. 本書の挿図の縮尺は以下の通りであるが、これ以外のものはスケールを参照されたい。
   奥尻島南部の遺跡分布図：１／50.000　　遺跡周辺の地形図：１／2,000
   土層断面図：１／40　　土器拓本図・礫石器実測図：１／３　　剥片石器実測図：１／２
3. 本書の石器計測単位は㎜である。
4. 本書の遺跡位置図及びグリット配置図の向きは方位で記す。
5. 写真図版の縮尺は、遺物に関しては各実測図、拓本図の縮尺に合わせた。

# 目　　次

例　　言 …… i
凡　　例 …… i
目　　次 …… ii
挿図目次 …… iii
挿表目次 …… iii
写真図版目次 …… iii
第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　1節　調査要項 …… 1
　2節　調査体制 …… 1
　3節　調査の経緯 …… 1
　4節　グリットの設定と調査方法 …… 1
　5節　旧石器確認調査 …… 2
　6節　遺物の分類 …… 2
第Ⅱ章　砥石線遺跡と周辺の遺跡 …… 3
　1節　周辺の状況 …… 3
　2節　当地区の沿革・現況 …… 5
　3節　基本層序 …… 6
第Ⅲ章　発掘区出土遺物 …… 7
　1節　土　器 …… 7
　2節　石　器 …… 8
第Ⅳ章　奥尻における縄文・続縄文時代の遺跡の立地と表採資料 …… 12
写真図版 …… 21

# 挿図目次

図Ⅰ－1　大グリット配置図・小グリット模式図 …… 2
図Ⅱ－1　奥尻島南部の遺跡分布図 …… 3
図Ⅱ－2　遺跡周辺の地形図 …… 4
図Ⅱ－3　発掘区内地形図 …… 5
図Ⅱ－3　土層断面位置図 …… 6
図Ⅱ－4　土層断面図 …… 6
図Ⅲ－1　発掘区出土土器図 …… 7
図Ⅲ－2　発掘区出土石器図 …… 9
図Ⅳ－1　奥尻島における縄文・続縄文時代の遺跡分布図 …… 13

# 挿表目次

表Ⅲ－1　拓本土器一覧表 …… 7
表Ⅲ－2　石族一覧表 …… 10
表Ⅲ－3　掻器一覧表 …… 10
表Ⅲ－4　Ｒフレイク一覧表 …… 10
表Ⅲ－5　Ｕフレイク一覧表 …… 10
表Ⅲ－6　石核一覧表 …… 10
表Ⅲ－7　石製品一覧表 …… 10
表Ⅲ－8　石斧一覧表 …… 10
表Ⅲ－9　石錘一覧表 …… 11

# 写真図版目次

図版1　遺跡調査風景 …… 21
図版2　旧石器確認調査状況・遺跡完掘状況 …… 22
図版3　包含層出土遺物 …… 23
図版4　奥尻島における縄文・続縄文時代の表採遺物（1） …… 24
図版5　奥尻島における縄文・続縄文時代の表採遺物（2） …… 25

# 第Ⅰ章　調査の概要

## 1節　調査要項

事業名　米岡奥尻空港線造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
原因者　北海道
調査者　奥尻町教育委員会
遺跡名　砥石線遺跡　北海道教育委員会搭載番号（C－07－32）
所在地　奥尻郡奥尻町字米岡163
調査面積　835㎡
調査期間　平成13年9月1日～10月23日（現場期間は9月30日まで）

## 2節　調査体制

| | | |
|---|---|---|
| 奥尻町教育委員会 | 教育長 | 山内　修介 |
| | 課長 | 竹田　彰 |
| | 主幹 | 泉澤　克尚 |
| | 調査員 | 木村　哲朗 |
| | 調査補助員 | 天方　博章 |

## 3節　調査の経緯

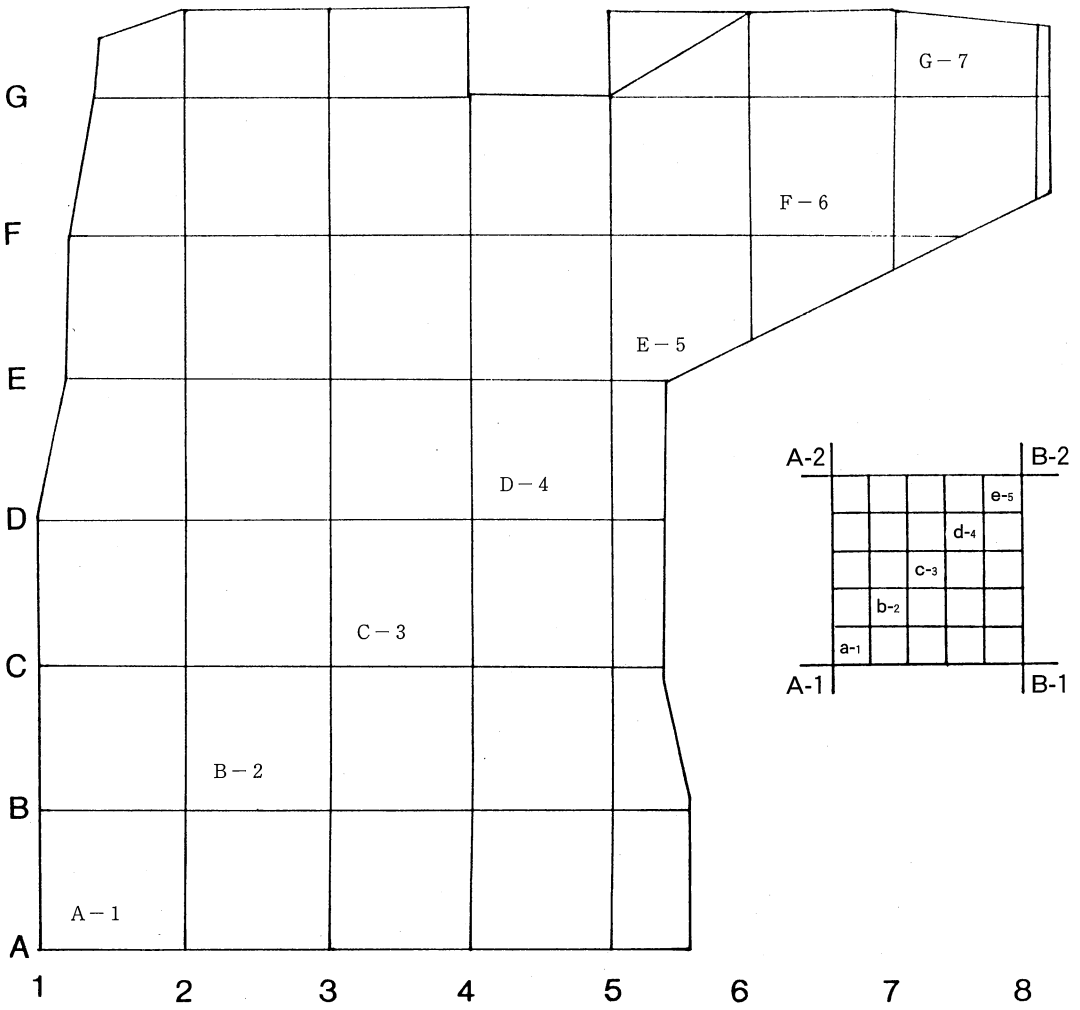
奥尻空港拡張工事に伴い、新たな空港ターミナルを新設することとなり、道道奥尻島線との間に新たな連絡道路を敷設する必要となった。平成12年9月、道教育委員会による道路建設予定地での遺跡確認調査が行われ、2ヶ所の試掘調査地点より、遺物が検出され、遺跡と確認された。その後の協議により、調査面積835㎡を砥石遺跡調査終了後の9月1日から1ヶ月の期間で調査が行われることとなった。

## 4節　グリットの設定と調査方法

グリットは米岡奥尻空港線のセンターラインに合わせ、X軸はセンターラインに対して垂直方向、Y軸はセンターラインに並行に設定された。グリットは大グリットと小グリットを設定し(図Ⅰ－1)、大グリットは5m×5mとした。グリットの起点は、米岡奥尻空港線の起点（センターライン上）から30m、センターラインから10mの場所に設定し、グリットの呼称は各グリットの西端の杭名をグリット名とした。X軸は北から1～7、Y軸は西からA～Gである。したがってセンターラインはY軸の3ラインにあたる。

調査方法はⅠ層（耕作・撹乱土層）を重機で除去し、それ以下の層はすべて移植ゴテによる調査とした。調査は層位発掘を基本とし、層の厚い場所は幾度かに分けて掘り下げた。

遺物の取り上げは、大グリット25分割した小グリット（1m×1m）単位で行ったが、撹乱の部分は大グリット単位で取り上げた。




**図Ⅰ－1　大グリット配置図・小グリット模式図**

## 5節　旧石器確認調査

当遺跡では20m² の範囲内において旧石器確認調査を行った(図版2)。これは全面積の約2.4%である。方法は地山のⅥ層をY軸に沿った20mのトレンチを1mの幅で掘り下げた。層はローム層に一部砂層が認められたが、遺構や遺物は検出されずに終わった。

## 6節　遺物の分類

### 1. 土　器

Ⅰ群　縄文時代早期に相当するもの。

Ⅱ群　縄文時代中期に相当するもの。

### 2. 石　器

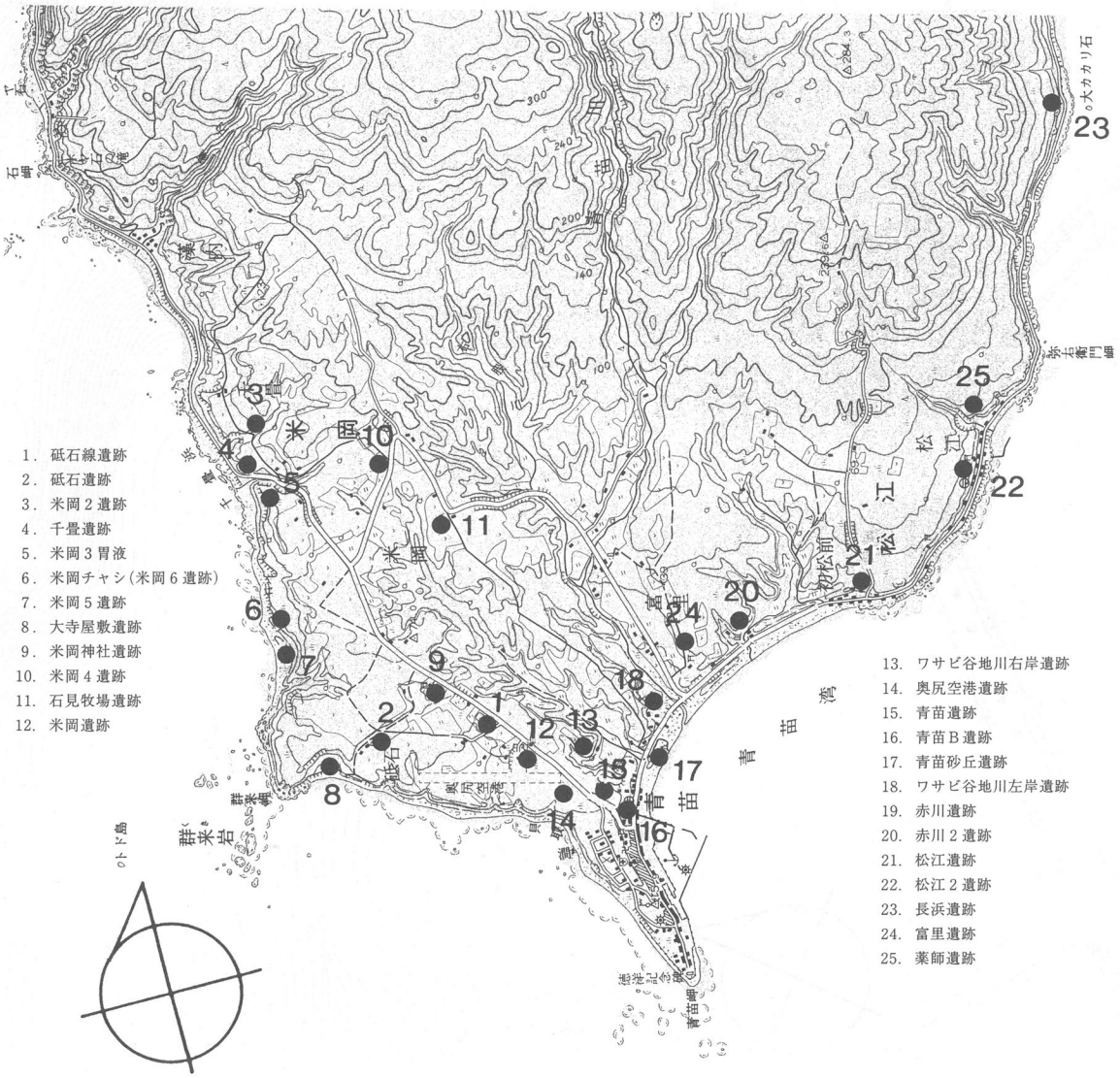
石族、掻器、Rフレイク、Uフレイク、石核、石製品、石斧、石錘などに分類した。

# 第Ⅱ章　砥石線遺跡と周辺の遺跡

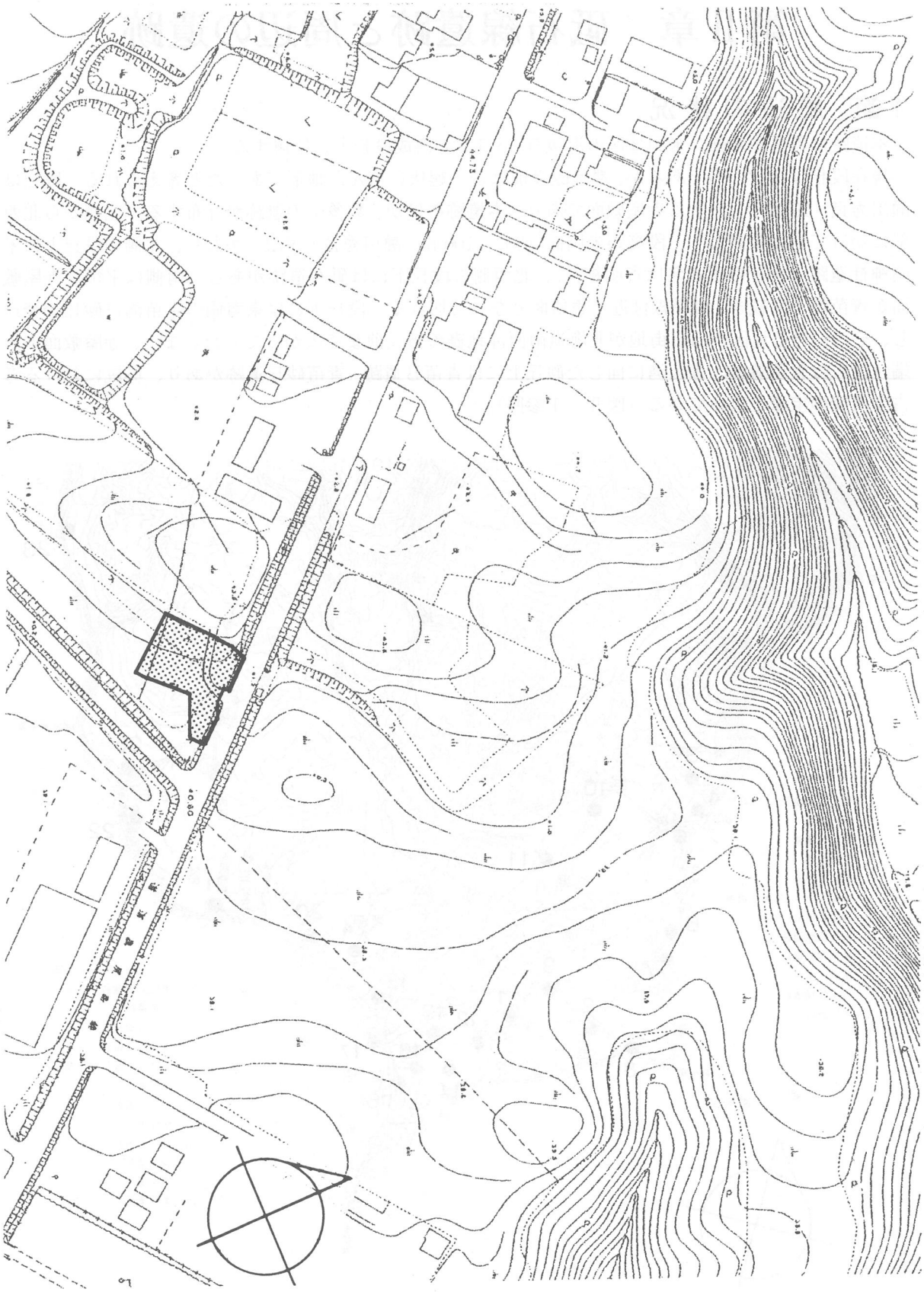
## 1節　周辺の状況

本遺跡は奥尻島南部、米岡地区の海抜50ｍほどの海成段丘上に位置する。

現在段丘はほぼ平坦であるが、農地改良前は若干起伏に富んだ地形であったと考えられる。段丘は瀬川秀良（1972年）による寺屋敷面であり、本遺跡のほか、数多くの遺跡が分布する。北側から北西部にかけて寺屋敷面より一段高い米岡面（80～100ｍ・瀬川秀良・1972）があり、北側の段丘上に米岡神社遺跡（神社の正式名は斉明神宮）、北西側の段丘下には砥石遺跡がある。南側は平坦な寺屋敷面が青苗岬まで続き、海岸線付近で急斜面となって切れる。段丘下には東南側の青苗湾に砂丘が発達し、そこに青苗地区の旧市街地が北海道南西沖地震の被災前まで広がっていた。また、寺屋敷面の南端付近には青苗遺跡、青苗湾に面した砂丘上には青苗Ｂ遺跡・青苗砂丘遺跡があり、奥尻における考古学研究の宝庫となっている（図Ⅱ－１参照）。




図Ⅱ－１　奥尻島南部の遺跡分布図

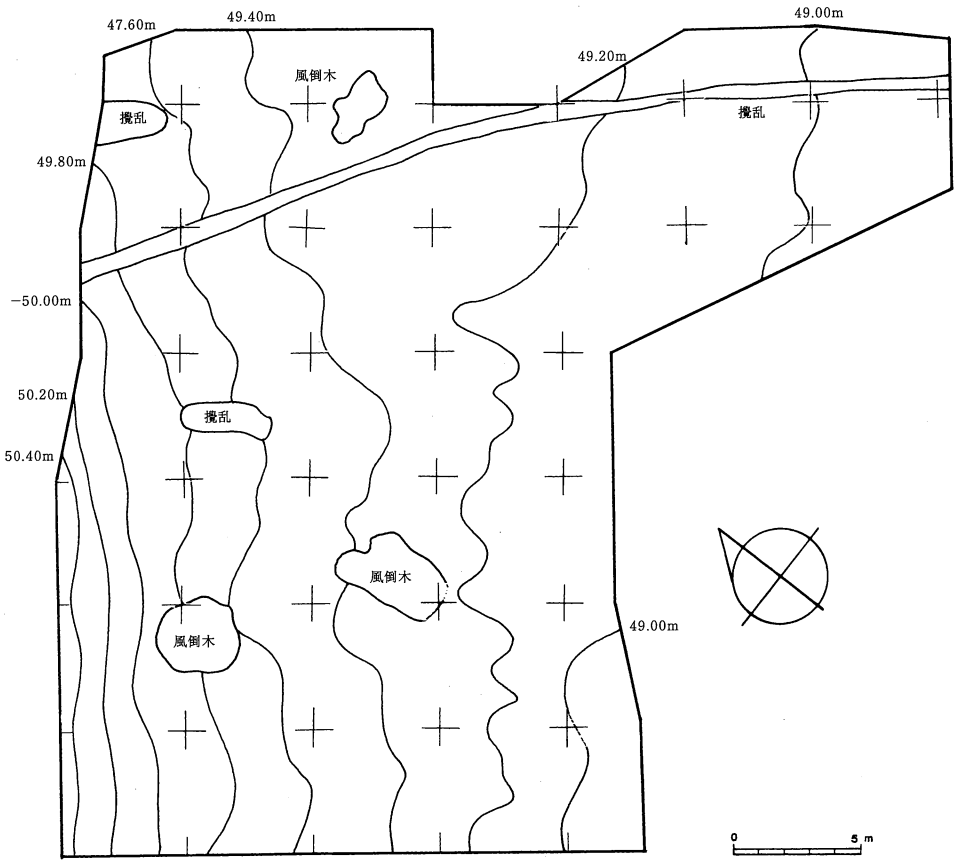


図Ⅱ－2　遺跡周辺の地形図

## 2節　当地区の沿革・状況

砥石線遺跡の命名は小字“砥石”地区と道道奥尻島線を結ぶ町道砥石線の道道側の進入路に位置することに基づいたもので、古代においても当地点を南部の青苗地域と西部の砥石地域を結ぶ中継地としての位置付けができまいかという予測から名付けたものである。しかし当初砥石線は、砥石地区と青苗市街地を直接結んだ西海岸に沿った道路に命名されたものであり、現在の砥石線は砥石線分線と呼ばれていた。その後本来の砥石線がが廃線となるに及んで砥石分線が砥石線と言われるようになったと考えられる。なお、この町道砥石線は当遺跡調査時には一部を除き空港拡張工事専用道路になり、空港の土工事（土盛り工事）とともにその役割を終えた。

本遺跡における地山の標高は49.00 m～50.40 mで、比高差は1.4 mである。
地山には風倒木が数多く認められ、かつては豊かな森林であったと考えられる（図Ⅱ－3参照）。開墾された後は畑として利用され、その後現在のような草地として整備された。そのため包含層の上層は殆ど破壊され、白頭山火山灰（B－Tm）層以上の包含層の遺存度は良くない。




**図Ⅱ－3　発掘区内地形図**

## 3節　基本層序

層序は当発掘区に設定されたグリットのＦラインに沿って記録した。

**Ⅰ層　耕　作　土**　　Ｋｏ－ｄ　駒ヶ岳起源の火山灰　黄褐色火山灰

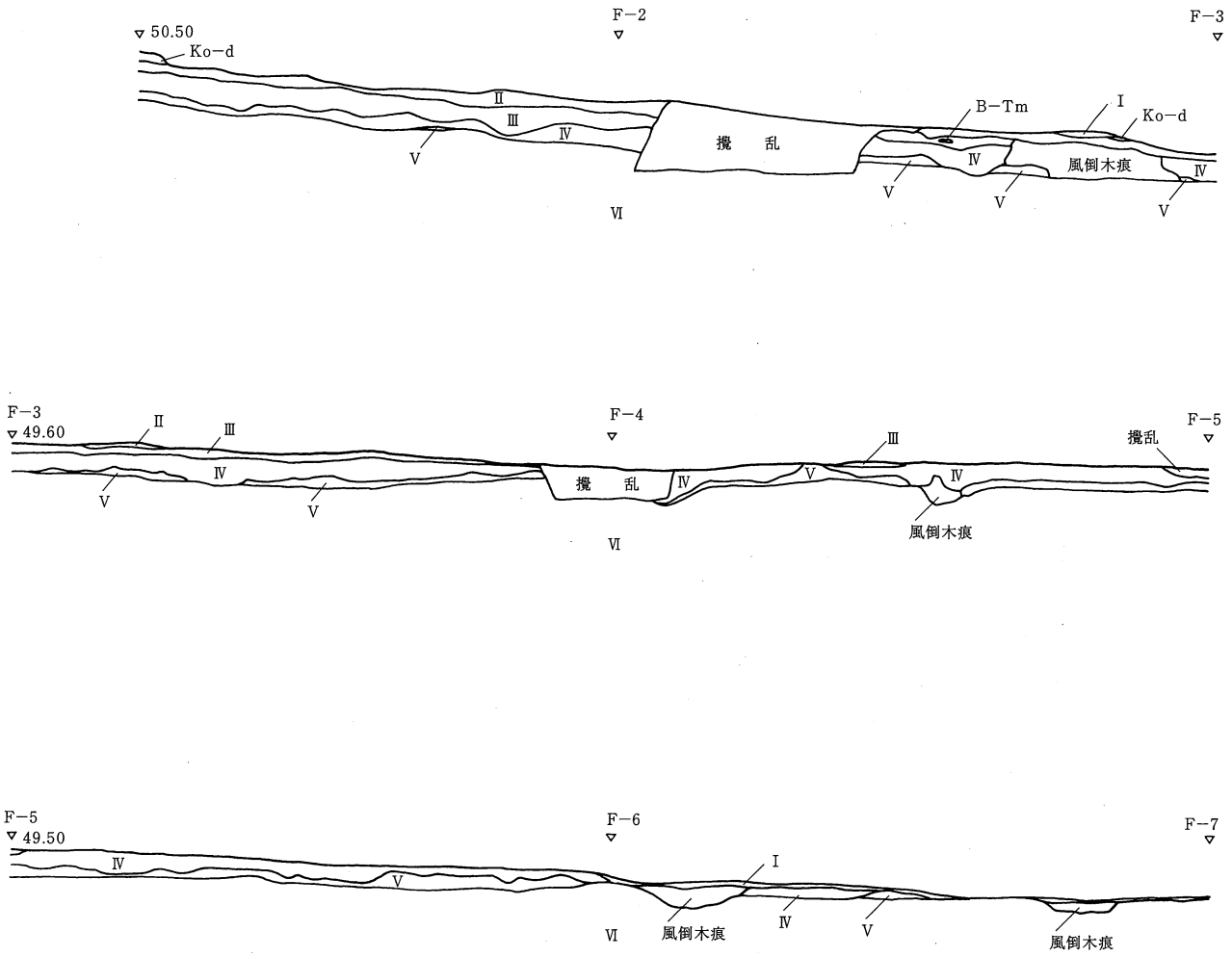
**Ⅱ層　黒褐色土層**　　Ｋｏ－ｄとＢ－Ｔｍ間の黒色腐植土

**Ⅲ層　暗褐色土層**　　この中に明褐色火山灰（Ｂ－Ｔｍ）がある。多くは不明瞭な層状、またはブロック状に見られる。

**Ⅳ層　黒褐色土層**

**Ⅴ層　暗黄褐色土層**　　Ⅳ層とⅥ層の漸移層

**Ⅵ層　黄褐色土層**　　基盤層




**図Ⅱ－4　土層断面図**

# 第Ⅲ章　発掘区出土遺物

## 1節　土　　器

計25点が出土している。時期の確認できる資料として縄文時代早期中葉のものが12点、早期末葉が1点、中期のものが4点である。そのうち特徴ある破片を9点紹介する。

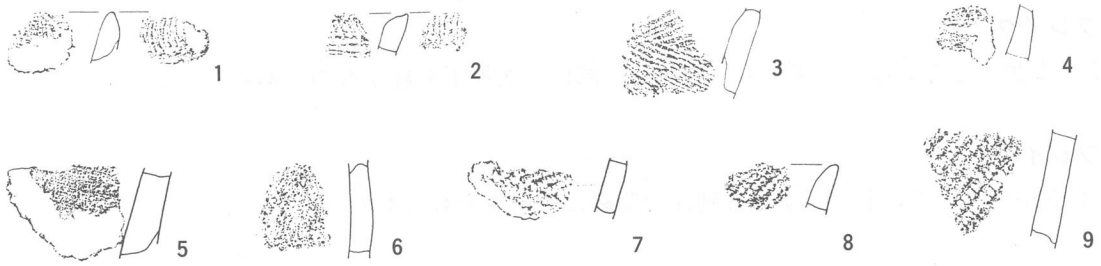
**Ⅰ群土器　　縄文時代早期のもの**

1～7までが当時期に属する。そのうち1～6は早期中葉と考えられる。1・2は口縁部の破片で、ともに断面が外削ぎ状を呈し、外面及び内面に文様が施されている。1の外面には斜め方向の貝殻腹縁圧痕文が、2には斜め方向の棒状工具による沈線文が施されている。内面はともに貝殻腹縁圧痕文が縦位に施される。3は口縁部文様帯の破片であるが口唇の部分は欠損している。文様は貝殻腹縁圧痕文が綾杉状に施されている。4～6は胴部の破片で4には貝殻条痕文が施されている。5は無文の破片であるが胎土や焼成などから青苗遺跡E地区出土の当時期の土器と共通するため、早期中葉と認定した。器厚があり大型土器の破片であったと考えられる。6は器面が著しく磨耗しているため文様の種類は確認できないが、内面には調整痕とみられる貝殻条痕がある。

7は早期末葉のもので、羽状縄文及び微隆起線文が僅かに認められるものである。

**Ⅱ群土器　　縄文時代中期のもの**

8・9が当時期に属する。8は口縁部の資料で口唇の断面形状は若干外削ぎ状である。文様は斜行縄文である。9は斜行縄文の施された胴部破片である。




**図Ⅲ－1　発掘区出土土器図**

**拓本土器一覧表**

| No. | 分類 | 層位 | グリット名 | 部位 | 文　　様 | 図番 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | Ⅰ | Ⅳ | E－4　a－4 | 口縁部 | 貝殻腹縁圧痕文 | 1 | |
| 2 | Ⅰ | Ⅳ | D－4　e－5 | 口縁部 | 貝殻腹縁圧痕文、沈線文 | 2 | |
| 3 | Ⅰ | Ⅳ | E－6　a－1 | 口縁部 | 貝殻腹縁圧痕文 | 3 | |
| 4 | Ⅰ | Ⅳ | F－2　e－4 | 口縁部 | 貝殻条痕文 | 4 | |
| 5 | Ⅰ | Ⅳ | F－2　b－4 | 胴　部 | 無文 | 5 | |
| 6 | Ⅰ | Ⅳ | C－1　b－2 | 胴　部 | 貝殻腹縁圧痕文 | 6 | |
| 7 | Ⅰ | Ⅳ | F－4　a－5 | 胴　部 | 微隆起線文、縄文 | 7 | |
| 8 | Ⅲ | Ⅳ | F－2　b－4 | 口縁部 | 縄文 | 8 | |
| 9 | Ⅲ | Ⅳ | F－3　b－2 | 胴　部 | 縄文 | 9 | |

## 2節　石　　器

包含層より出土した石器は、石鏃12点、削器3点、掻器1点、Rフレイク5点、Uフレイク15点、石核15点、石錘5点、石斧片1点、すり石1点、石製品1点である。石器は調査区北東側の緩やかな斜面に散見的に分布する。調査区より縄文時代早期中葉･中期に相当する土器片が出土しているが、層位によって、石器の時期を確認することはできなかった。

### 石　　鏃

12点が出土している。1・4は柳葉形である。1は背面・腹面に、4は腹面に大きく一次剥離面を残す。2は木葉形で腹面に一次剥離面大きく残す。3・5・6・8～10は有茎鏃である。3・5・6・9・10は、刺突部がほぼ正三角形を呈するものである。また、3・5・10は両側縁がやや内湾している。7は無茎鏃である。

### 削　　器

3点が出土している。11～13は横長の剥片を利用している。11・13は下端部にほぼ直線的な刃部を持つものである。13は両側縁に微細な剥離が見られる。12は下端部から右側縁にかけて、両面調整の刃部を持つものである。

### 掻　　器

1点が出土している。14は縦長の剥片を利用し、右側縁に大きく内湾した、急斜度の刃部を持つものである。左側縁に微細な剥離がみられる。

### Rフレイク

5点が出土している。いずれも、剥片の一部に二次加工を施すものである。

### Uフレイク

15点が出土している。いずれも剥片の側縁に使用痕をもつものである。

### 石　　核

1点が出土してる。頁岩製である。

### 石 製 品

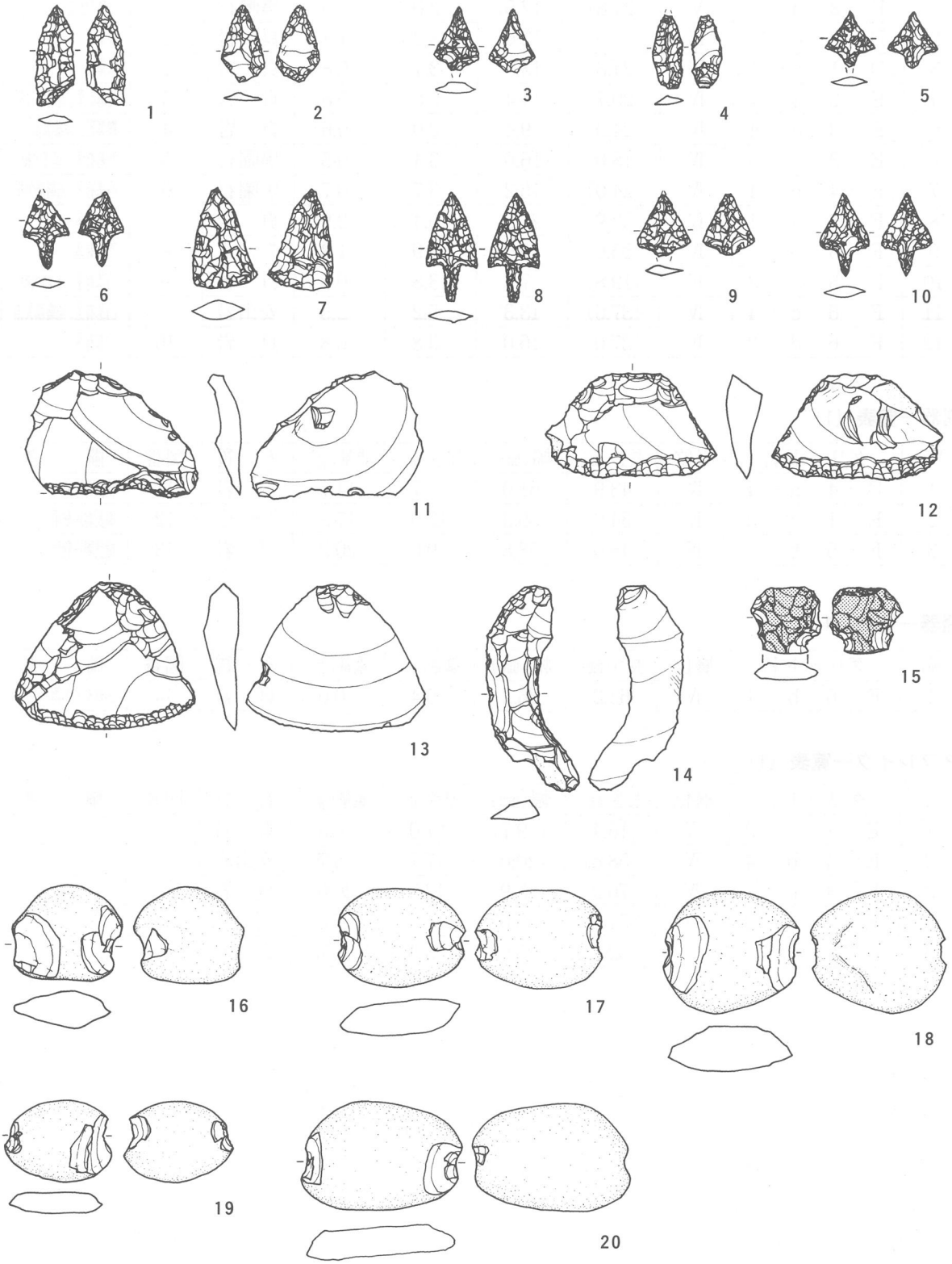
1点が出土している。下端部は被熱後に欠損している。また、両側縁に4ヶ所の抉入がある。抉入部はいずれも被熱後に調整されている。スクリーントーンは被熱を表す。

### 石　　斧

石斧片が1点出土している。

### 石　　錘

5点出土している。いずれも偏平な楕円礫を素材とし、抉入部が長軸の両端にあるものである。




図Ⅲ－2　発掘区出土石器図

## 石鏃一覧表（1）

| No. | グリット名 | 層位 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 石　質 | 図番 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | B－2　d－1 | V | (21.8) | (12.5) | 2.0 | 0.5 | 黒曜石 | | 一端1/2欠 |
| 2 | D－1　c－4 | Ⅳ | 32.5 | 12.6 | 3.2 | 1.4 | 頁　岩 | 1 | 柳葉形 |
| 3 | D－1　d－1 | Ⅳ | 24.8 | 13.8 | 3.1 | 0.8 | 頁　岩 | 2 | 木葉形 |
| 4 | E－2　b－1 | Ⅳ | (20.7) | 14.4 | 3.8 | 0.8 | 頁　岩 | 3 | 凸基有茎、先端部欠損 |
| 5 | E－3　c－4 | Ⅳ | (24.0) | 9.4 | 2.9 | 0.6 | 頁　岩 | 4 | 柳葉形、基部欠損 |
| 6 | E－3　c－5 | Ⅳ | (18.0) | 16.0 | 3.4 | 0.5 | 黒曜石 | 5 | 凸基有茎、基部欠損 |
| 7 | E－4　b－4 | Ⅳ | (24.0) | 15.2 | 3.7 | 0.7 | 黒曜石 | 6 | 凸基有茎、先端部欠損 |
| 8 | F－3　a－1 | Ⅳ | 32.9 | 21.2 | 5.4 | 2.9 | 頁　岩 | 7 | 平基無茎 |
| 9 | F－3　b－3 | Ⅳ | 35.6 | 16.0 | 3.9 | 1.3 | チャート | 8 | 凹基有茎 |
| 10 | F－3　e－3 | Ⅳ | (19.8) | 7.2 | 3.8 | 0.9 | 頁　岩 | 9 | 凸基有茎、基部欠損 |
| 11 | F－6　c－4 | Ⅳ | (37.6) | 13.3 | 5.2 | 2.5 | 安山岩 | | 凸基有茎、先端部欠損 |
| 12 | F－6　d－2 | Ⅳ | 27.0 | 16.0 | 3.8 | 0.8 | 頁　岩 | 10 | 凸基有茎 |

## 削器一覧表（1）

| No. | グリット名 | 層位 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 石　質 | 図番 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | D－4　a－4 | Ⅳ | 43.9 | 61.0 | 7.7 | 14.7 | 頁　岩 | 11 | 横長剥片利用 |
| 2 | E－1　c－3 | Ⅳ | 34.0 | 55.3 | 12.0 | 17.8 | チャート | 12 | 横長剥片利用 |
| 3 | F－5　b－3 | Ⅳ | 48.0 | 58.8 | 9.0 | 20.3 | 頁　岩 | 13 | 横長剥片利用 |

## 掻器一覧表（1）

| No. | グリット名 | 層位 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 石　質 | 図番 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | F－6　b－1 | Ⅳ | 62.2 | 36.2 | 5.4 | 10.0 | 頁　岩 | 14 | 刃部やや内湾 |

## Rフレイク一覧表（1）

| No. | グリット名 | 層位 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 石　質 | 図番 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | E－1　c－3 | Ⅳ | (16.4) | ( 9.7) | ( 7.0) | 0.8 | 頁　岩 | | |
| 2 | E－4　b－4 | Ⅳ | (58.6) | (20.0) | 17.7 | 8.7 | 安山岩 | | |
| 3 | E－4　e－1 | Ⅳ | 76.2 | (22.9) | 12.0 | 20.0 | 頁　岩 | | |
| 4 | F－1　a－3 | Ⅳ | 51.5 | 33.0 | 15.2 | 17.3 | 頁　岩 | | |
| 5 | 表　　採 | | 32.0 | 25.6 | 13.4 | 9.5 | 頁　岩 | | |

## Uフレイク一覧表（1）

| No. | グリット名 | 層位 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 石　質 | 図番 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | B－3　a－5 | Ⅳ | 63.2 | 33.4 | 6.0 | 11.7 | チャート | | |
| 2 | B－4　e－2 | Ⅳ | 57.1 | 47.8 | 16.1 | 36.1 | 頁　岩 | | |
| 3 | C－1　d－1 | Ⅳ | 45.6 | 22.1 | 6.3 | 6.5 | 頁　岩 | | |
| 4 | D－1　d－4 | Ⅳ | 30.6 | 31.0 | 8.2 | 5.5 | 頁　岩 | | |
| 5 | D－1　e－5 | Ⅳ | 53.9 | 34.8 | 13.2 | 17.8 | 頁　岩 | | |
| 6 | E－1　b－2 | Ⅳ | 61.6 | 51.5 | 8.9 | 17.6 | 頁　岩 | | |
| 7 | E－1　c－2 | Ⅳ | 44.4 | 23.4 | 8.1 | 5.2 | 頁　岩 | | |
| 8 | E－1　c－5 | Ⅳ | 28.7 | 24.6 | 4.4 | 2.6 | 頁　岩 | | |
| 9 | E－1　e－3 | Ⅳ | 37.4 | 49.2 | 7.9 | 15.1 | 頁　岩 | | |
| 10 | F－1 | ｶｸﾗﾝ | 28.7 | 32.2 | 12.2 | 6.9 | 頁　岩 | | |
| 11 | F－2　b－4 | Ⅳ | 29.8 | 31.0 | 6.4 | 3.7 | 頁　岩 | | |
| 12 | F－2　b－4 | Ⅳ | 36.2 | 37.5 | 17.2 | 17.8 | 頁　岩 | | |
| 13 | F－3　a－1 | Ⅳ | 35.5 | 44.8 | 9.3 | 9.1 | 頁　岩 | | |
| 14 | F－5　c－3 | Ⅳ | 31.4 | 28.6 | 3.3 | 1.9 | 頁　岩 | | |
| 15 | G－3　b－4 | Ⅳ | 25.5 | 35.0 | 9.5 | 4.0 | 頁　岩 | | |

## 石核一覧表（1）

| No. | グリット名 | 層位 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 石　質 | 図番 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | E－3　d－3 | Ⅳ | 40.0 | 50.0 | 34.6 | 73.9 | 頁　岩 | | |

## 石製品一覧表（1）

| No. | グリット名 | 層位 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 石　質 | 図番 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | D－3　a－2 | Ⅳ | (21.5) | 22.9 | 5.8 | 3.4 | 黒曜石 | 15 | 被熱、一端1/2欠 |

## 石斧一覧表（1）

| No. | グリット名 | 層位 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 石　質 | 図番 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | B－5　c－2 | Ⅳ | | | | 4.0 | 緑色泥岩 | | 石斧片 |

## 石錘一覧表（1）

| No. | グリット名 | 層位 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重量(g) | 石　質 | 図番 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | D－1　c－2 | Ⅳ | 52.3 | 45.8 | 16.6 | 48.6 | 安山岩 | 16 | 長軸両端抉入 |
| 2 | D－4　c－2 | Ⅳ | 61.8 | 47.6 | 17.8 | 73.4 | 安山岩 | 17 | 長軸両端抉入 |
| 3 | D－5　a－2 | Ⅳ | 64.0 | 58.7 | 21.4 | 107.1 | 安山岩 | 18 | 長軸両端抉入 |
| 4 | E－1　b－5 | Ⅳ | 51.5 | 39.0 | 1.0 | 25.3 | 安山岩 | 19 | 長軸両端抉入 |
| 5 | E－3　d－5 | Ⅳ | 79.3 | 53.5 | 18.8 | 104.9 | 安山岩 | 20 | 長軸両端抉入 |

# 第Ⅳ章　奥尻島における縄文・続縄文時代の遺跡の立地と表採資料

本遺跡には縄文時代早期～中期にかけての遺物が計200点出土した。本遺跡を始め奥尻島には数多くの遺跡が確認されている。現時点では縄文時代の遺物が出土した遺跡が22ヶ所、続縄文時代の遺物が出土した遺跡が計9ヶ所、オホーツク文化期のの遺物が出土した遺跡2ヶ所、擦文時代の遺物が出土した遺跡7ヶ所である。ここでは奥尻島各地における縄文時代・続縄文時代の遺跡の立地について考え、あわせて一部の現存する表採資料を紹介していきたい（遺物は図版4・5に掲載）。

## ①奥尻島の遺跡

### 1.　薬師遺跡

奥尻島の東海岸にある松江地区、ラント川の北岸の段丘上に位置する。昭和31年の千代肇「北海道奥尻島遺跡調査概報」考古学雑誌第14巻第2号において初めて紹介された。表採により石斧が発見されている。

### 2.　青苗遺跡

奥尻島南部、青苗地区の海岸段丘上に位置する。昭和6年刊行の深瀬春一「奥尻島紀行」に紹介され、その後も鈴木尚、千代肇らにより発掘調査が行われた。現在知られている奥尻島の遺跡の中で最も面積が広く、時期も縄文時代早期中葉から擦文時代に至る各時期の遺構、遺物が発見されている。とくに米岡地区に属する遺跡北西部、通称“工藤さんの沢”を介した西側の段丘縁辺部は縄文時代早期中葉～末葉の遺構・遺物の宝庫であり、段丘斜面には早期中葉の石組遺構が3基検出されている他、段丘上には早期末葉の作業領域が認められている。ここで紹介した遺物は平成13年に表採されたものである。

1は掻器で一側縁背面加工である。石質は頁岩である。この他擦文土器の小破片が表採されている。

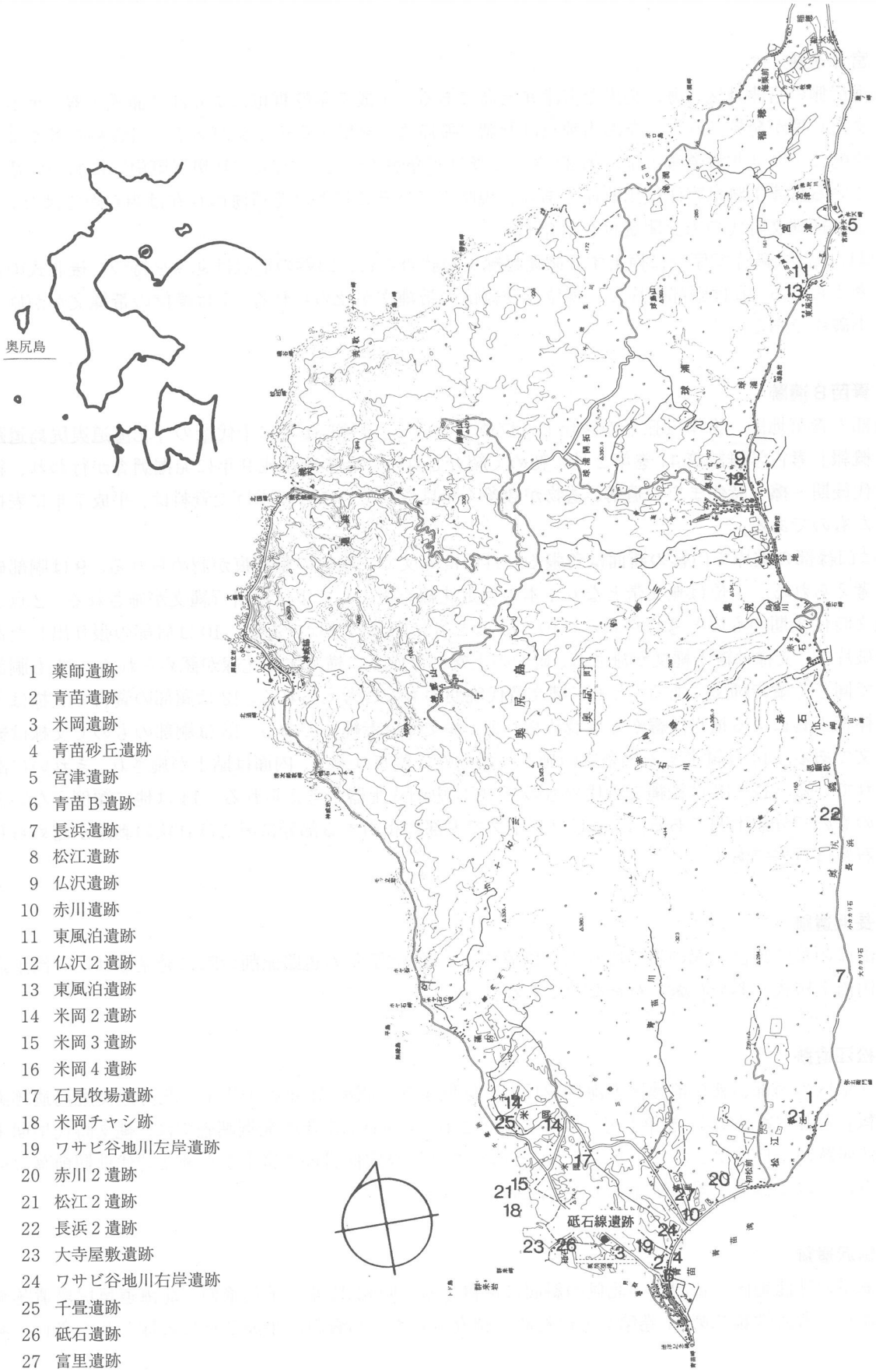
### 3.　米岡遺跡

南部の米岡地区、海岸段丘上に位置する。昭和31年千代肇の「北海道奥尻島遺跡調査概報」考古学雑誌第14巻第2号に初めて掲載された。平成5年の試掘調査では、縄文時代早期～中期の土器が出土している。この他、円筒上層式土器や石族、石斧、北海道式石冠も表採されている。

### 4.　青苗砂丘遺跡

青苗地区のワサビ谷地谷地川河口にある海岸砂丘上に位置する。平成9年、木村・安西雅希により発見された。その時に表採された資料が十和田式土器（オホーツク文化）であることから、注目を集め、平成13年には北海道により重要遺跡確認調査が行われた。それらの資料及び表採資料は平成14年に刊行される重要遺跡確認調査報告書で紹介される予定である。ここでは同じく平成9年に表採された縄文時代の資料を紹介する。

2は、口縁部の破片で口唇の断面は外削ぎ状を呈する。文様は斜行縄文である。3は胴部の破片で結束第1種の羽状縄文が施されている。ともに縄文時代中期の所産である。4は石錘で、側縁部の打ち欠きが1ヶ所のみのものである。




1　薬師遺跡
2　青苗遺跡
3　米岡遺跡
4　青苗砂丘遺跡
5　宮津遺跡
6　青苗Ｂ遺跡
7　長浜遺跡
8　松江遺跡
9　仏沢遺跡
10　赤川遺跡
11　東風泊遺跡
12　仏沢２遺跡
13　東風泊遺跡
14　米岡２遺跡
15　米岡３遺跡
16　米岡４遺跡
17　石見牧場遺跡
18　米岡チャシ跡
19　ワサビ谷地川左岸遺跡
20　赤川２遺跡
21　松江２遺跡
22　長浜２遺跡
23　大寺屋敷遺跡
24　ワサビ谷地川右岸遺跡
25　千畳遺跡
26　砥石遺跡
27　富里遺跡

**図Ⅳ－１　奥尻島における縄文・続縄文時代の遺跡分布図**

### 5. 宮津遺跡

東海岸側の宮津地区、海に突出た宮津弁天島にある。平成7年乾哲也により江ノ浦式土器（オホーツク文化）等が発見された。なお当地点は所謂“孤島式”を呈するチャシがある。当資料の多くは平成7年乾により「北海道考古学　第33巻」で資料紹介がされた。なお、“新奥尻町史”において紹介されている宮津遺跡は宮津沢川北岸であり、現時点ではそこにおける遺跡の存在は明らかではない。ここでは続縄文時代の未公開資料を紹介する。

5は口縁部の破片で僅かに横走する微隆起線文が認められ、口唇の形状は丸みを持つ。後北式の資料と考えられる。6は胴部破片で、横位及び縦位の帯縄文が認められる。7は横位の帯縄文がが施された小破片である。

### 6. 青苗B遺跡

南部の青苗地区、海岸段丘下の砂丘上に位置している。昭和31年に千代肇の「北海道奥尻島遺跡調査概報」考古学雑誌第41巻第2号に初めて紹介された。その後平成9年に発掘調査が行われ、縄文時代後期～擦文時代までの遺構、遺物が数多く発見された。ここで挙げた資料は、平成7年に表採されたものである。

8は口縁部の破片で口唇の断面は角張る。外面は無文で、横位の整形痕が認められる。9は胴部破片と考えられる。上位は無文帯となり1本の横走沈線を境にして下位は斜行縄文が施される。2点とも縄文時代後期のものと考えられる。10・11はともに胴部の破片である。10は肩部の張り出した器形の破片で、文様は縦走縄文が施され、破片の上端には僅かに横走する沈線が認められる。11も胴部破片で同じく縦走縄文である。ともに縄文時代晩期のものと考えられる。12は頸部の資料で文様は太めの棒状工具による横走沈線が5本認められる。地文は縦走縄文である。13は胴部のもので文様は縦走縄文である。14は縦走する撚糸文の施されたもので器厚は薄く、内面は貼土が施され、きれいに調整されている。12・13は続縄文時代のもので12は恵山式土器と考えられる。14は他に類例がないタイプのもので分類不明である。15はUフレイクで刃部に相当する部分に刃こぼれ状の剥離が認められる。石質は頁岩である。

### 7. 長浜遺跡

東海岸の松江地区北部の海岸段丘上に位置する。昭和27年の道路開削の際に発見された。出土遺物は円筒上層式土器や石鏃・石斧などである。

### 8. 松江遺跡

松江地区の南部、初松前地区の海岸段丘上に位置する。昭和31年の千代肇「北海道奥尻島遺跡調査概報」考古学雑誌第41巻第2号で初めて紹介された。昭和57年の発掘調査では、縄文時代早期末葉の住居跡が4件検出されている。なお、そのうち2号竪穴住居跡の覆土から縄文時代前期前葉の道南地方における標識土器、松江式土器を出土している。

### 9. 仏沢遺跡

東海岸の球浦地区、仏沢川の北側の斜面に位置する。昭和31年、千代肇の「北海道奥尻島遺跡調査概報」～考古学雑誌第41巻第2号に初めて紹介された。当資料は平成7年に表採された資料である。

16は胴部の破片で、工字文ふうの文様が認められる。17は無文のもので16同様胴部の破片である。共に縄文時代晩期と考えられる。18は口縁部の破片で口唇は内削ぎ状を呈する。口唇直下には斜行縄

文が施され、その下位には太い棒状工具による横走沈線が数条めぐる。内面にも同様の棒状工具による横走沈線が1条施される。19は縦走の縄文が認められるものである。18・19共に続縄文時代のものと考えられる。

この他擦文時代と考えられる破片も1点表採されている他、フレイク2点（そのうち黒曜石のもの1点）土器小破片7点が表採されている。

**10. 赤川遺跡**

富里地区の東海岸側、青苗川の北側に細長く続く砂丘上に位置する。昭和31年の千代肇「北海道奥尻島遺跡調査概報」～考古学雑誌第41巻第2号に初めて紹介された。当資料は平成8年に表採されたものである。

20･21ともに胴部の破片で、ともに縦走縄文が施されている。2点とも縄文時代晩期のものである。なお、当遺跡は平成9年度の試掘調査時に海側の砂丘の下から数多くの擦文式土器が出土し、その資料は“平成13年度 赤川遺跡～道々奥尻島線改修工事にともなう試掘調査報告書”で報告している。

**11. 東風泊遺跡**

宮津地区の南端に位置し、海岸砂丘上に所在する。昭和31年の千代肇「北海道奥尻島遺跡調査概報」考古学雑誌第41巻第2号に初めて紹介された。昭和53・54年に発掘調査がされている。ここで紹介された資料は平成6年に表採されたものである。

22・23は頸部の破片で帯縄文の施されているものである。続縄文時代前半期のものと考えられる。

**12. 仏沢2遺跡**

東海岸の球浦地区、仏沢川の南側の海岸砂丘上に位置する。平成7年での表採で発見された。ここに紹介したものはこの表採資料である。

24は太めの棒状工具による沈線が幾何学的に施されたものである。地文は目の細かい縄目による斜行縄文で、縄文時代晩期の精製土器の破片と考えられる。25は縦位の帯縄文が施されたもので胴部破片である。26は無文の土器で、ともに続縄文時代のものと考えられる。この他土器破片2点、フレイクチップ2点（このうち黒曜石が1点）出土している。

**13. 東風泊2遺跡**

東海岸の球浦地区の北端、海岸砂丘上に位置している。昭和55年の北海道教育委員会による範囲確認調査により発見された。

**14. 米岡2遺跡**

米岡地区の西海岸から沢状地形を300m内陸に入った段丘上に位置している。昭和53年に北海道教育委員会による「範囲確認調査」で発見され、同年発掘調査が行われた。続縄文時代恵山期の出土遺物が数多く発見されている。

**15. 米岡3遺跡**

米岡地区の西海岸沿い、海岸段丘上に位置する。続縄文時代の土器類などが出土している。なお、“新奥尻町史”における米岡3遺跡はここで取り上げた千畳遺跡のことである。

### 16. 米岡4遺跡

米岡地区、ワサビ谷地川の奥の沢頭周辺に所在する。昭和53年の北海道教育委員会の「範囲確認調査」で石斧を検出し、遺跡と認定された。平成8年の踏査では縄文時代早期中葉と考えられる土器の小片1点とフレイク6点を表採した。

### 17. 石見牧場遺跡

富里地区、青苗川の枝沢最奥部の左岸一帯が当遺跡である。昭和40年頃の草地改良の際に発見された。多数の土器類や貝殻などが表採されている。

### 18. 米岡チャシ跡

米岡地区の西海岸沿い、海岸段丘上に位置する。平成7年乾より発見された。当地点には所謂“先丘式”のチャシ跡がある。当資料は縄文時代のもので平成7年に表採されたものである。

27はつまみ付きナイフで、刃部の下半分が欠損する。両側縁背面加工で石製は頁石である。

### 19. ワサビ谷地川左岸遺跡

南部の青苗地区、ワサビ谷地川左岸の段丘上に位置する。平成7年乾により発見された。段丘上からは縄文時代中期、段丘の下位からは擦文時代の遺物が出土している。なお、“新奥尻町史”では青苗小学校裏遺跡の名で紹介された。ここに掲載する資料は平成8年に表採されたものである。

28～32は口縁部の資料である。28は無文の部分に3本の横走する縄線文が施されたものである。口唇の形状は丸みを持つ。29は無文部分に竹管状工具による斜め方向からの刺突文が上下2列施されたもので、口縁部文様帯の下位には斜行縄文が施される。口唇は僅かに外反する。30は斜行縄文の施されたもので口唇は内削ぎ状を呈する。31は網目状撚糸文の施されたものである。32は無文のもので口唇が若干角張る。33～35は胴部の破片である。33は2本の太さの異なる縄を撚り合わせた原体により斜行縄文が施されている。34は無節の原体による斜行縄文、35は無文のものである。ここに取り上げた資料の多くは縄文時代中期と考えられるが、35は後期初頭の可能性がある。28・29は中期後葉のものである。この他ここで掲載しなかったが土器破片74点（そのうち8点が擦文土器）、Rフレイク・石核・たたき石各1点、フレイクチップ35点が表採されている。

### 20. 赤川2遺跡

富里地区の東海岸側に位置し、赤川右岸の海岸段丘・海岸砂丘上に所在する。平成7年乾により発見された。ここで掲載したものもこのときの表採資料である。

36～38の3点すべて胴部の破片である。36は撚りの雑な縄文が横方向に施されている。37は無文の土器である。器面の調整は極めて粗い。38は僅かに縄文が認められる資料である。3点とも縄文時代中期のものと考えられる。

この他当遺跡からは土器破片5点、フレイクチップ12点が表採されている。

### 21. 松江2遺跡

東海岸の松江地区、ラント川右岸の海岸段丘上に所在する。平成7年乾に頼発見された。ここに挙げた資料は平成7～8年に表採したものである。39は縦走縄文の施された土器小片で、続縄文時代のものと考えられる。40はすり石である。花崗閃緑岩製であり、小さく、周縁部には、敲打調整の跡が認められる。形状は長楕円形である。この他石核1点、フレイク4点が表採されている。

### 22. 長浜2遺跡

東海岸、松江地区の北部の海岸段丘上に所在する。平成7年、北海道教育委員会の「範囲確認調査」で発見され、同年、発掘調査が行われた。ここに挙げた資料は調査前の表採資料である。

41は石錐である。刃部のみではなく全体に調整を施している。

### 23. 大寺屋敷遺跡

米岡地区の西海岸側、海岸段丘上に位置している。1617年松前山法源寺4世芳龍により建立された大仙寺の跡地でもある。ここでは平成7年に表採された縄文時代の資料を紹介する。

42は石錘で比較的小形のものである。石製は安山岩である。

### 24. ワサビ谷地川右岸遺跡

米岡地区南端、ワサビ谷地川右岸の段丘上に位置している。平成8年木村により発見された。表採遺物はフレイク1点である。この他、段丘下からは、近世～近代の陶磁器片や鉄器類が表採されている。

### 25. 千畳遺跡

米岡地区の西海岸側、海岸段丘上に位置している。平成8年乾により発見された。

氏によると段丘先端部の崖面に竪穴住居跡と考えられる黒色土の窪みが確認でき、その覆土ないし床面から土器片を採集したという。なお、“新奥尻町史”では米岡3遺跡として紹介されている。

43は口縁部、44は胴部の資料でともに同一個体と考えられ、住居跡と考えられる黒色土の窪みより検出されたものである。口唇の断面は角形を呈し、口唇直下及び胴部にはそれぞれ1条の貼付帯がめぐる。地文は斜行縄文で、貼付帯の上から施されている。内面には縦位の調整が認められる。時期は縄文時代中期末葉と考えられる。45～49は同一個体と考えられる土器破片である。45・46は帯縄文が縦及び横位に、47は縦位、48は横位に施されている。49は無文帯の部分の破片で、これらは続縄文時代恵山期のものと考えられる。これと同一個体と考えられる破片がこの他45点発見されているが、全て小破片である。50はすり石で扁平な楕円礫を利用しており、側縁部の打ち欠きや周縁部の調整などはなされていない。石質は安山岩である。51は扁平な礫の周縁部を加工したもので所謂“半円形打製石器”と呼ばれているものである。これも石質は安山岩で、ともに住居跡と考えられる窪みより表採された。この他では土器15点、フレイクチップ4点が出土している。

### 26. 砥石遺跡

米岡地区の西部、海岸線より300mほど内陸に入った段丘上に位置する。平成11年、北海道教育委員会の「範囲確認調査」で発見された。平成12・13年度の発掘調査では土壙600余基が検出されている。

### 27. 富里遺跡

富里地区の青苗川北岸の段丘上に位置する。平成8年木村により発見された。

52は口縁部破片で細い角棒状工具による横位の押引文が2条めぐる。53は羽状の撚糸文と綾絡文が横位にめぐるものである。ともに縄文時代早期末葉のものと考えられる。54は削器で両側縁両面加工、背面は全面加工を施している。石製は頁岩である。

奥尻島には多くの縄文時代・続縄文時代の遺跡が認められる。ここでは砥石線遺跡との関連に焦点をあてながら、各時代における遺跡の立地条件について述べたい。

## ②．各時期における遺跡の分布傾向について

縄文時代早期中葉の検出された遺跡は、現在知られている限り本遺跡をはじめ青苗遺跡、米岡４遺跡である。青苗遺跡では最も当時期の遺物が出土したＣ地区（カベ山）及びＦ地区の状況をみると、Ｃ地区は段丘の比較的先端部、Ｆ地区は段丘の斜面の沢状地形に分布の中心がある。縄文時代早期末葉になると青苗遺跡ではＣ・Ｆ地区ともに、より標高の高い段丘上の平坦部に移動する。また、富里遺跡、松江遺跡などの海岸段丘上の平坦部を生活の場とする遺跡が増える反面、本遺跡や米岡４遺跡などの内陸を生活の場とした遺跡の割合は少なくなる傾向にある。

縄文時代前期前葉の状況は松江遺跡出土の所謂松江式土器以外に明確に捉えることはできない。しかし、前期後葉～末葉になるとにわかに遺構・遺物が増える。とくに青苗遺跡では更に生活の場が高い地点に移り、西海岸･東海岸双方を見下ろす場所（Ａ地区）及び、より岬の先端に近い側（Ｂ地区）に移り、こうした場の占地状況が縄文時代中期前葉まで受け継がれる。中期中葉になると青苗遺跡ではＣ地区の段丘の先端部、Ｆ地区における段丘の斜面の沢状地形に遺構、遺物の分布の中心が移る。この分布傾向は同地区の縄文時代早期中葉の遺構・遺物の分布と共通しており、かけ離れた両時代において、同じような場を選択させるような気候・気象条件等があったのかもしれない。この他長浜・長浜２・千畳遺跡など縄文時代中期の遺跡が海岸段丘の先端部を中心に分布する。全体として見ると場の占地における海への依存が縄文時代早期末葉以降から縄文時代中期にかけて明確に表れる。

縄文時代後期以降、後期初頭における青苗遺跡Ｃ地区の住居跡の分布を除き、海岸段丘上を生活の場として使われなくなる。青苗Ｂ・東風泊・東風泊２・仏沢・仏沢２・赤川遺跡などは縄文時代後期・晩期・続縄文時代前葉の遺物が出土した遺跡であるが、その出土地点はすべて海岸砂丘上である。その反面、続縄文時代前葉を中心に後葉にかけて海岸段丘上に立地する遺跡として米岡２・米岡３・千畳・宮津遺跡がある。

## ③．場の選択における２つの傾向

沿岸部における縄文時代の場の占地が気候変動に伴う海進、海退と大きく関わっているという指摘は古くからなされている。縄文海進（ＢＣ 6000 ～ 5000 年前）よる海水面の上昇が、生活の場を高台である海岸段丘上に進出させ、その後の海水面の低下に伴う海岸砂丘の形成がそこに人を進出せしめる。奥尻島の遺跡群についてもおおよそ共通する傾向が認められると言えよう。つまり、縄文時代早期末葉以降から続く場の占地における海への依存が、海岸線の変動に関わらず基本的に変わらず続いてきたと言えるのである。

しかし、本遺跡を始め、米岡４遺跡、石見牧場遺跡、砥石遺跡、米岡２遺跡のように海岸線を避けるような立地条件も認められる。

砥石遺跡は沢状地形の上流部の湧水地点を中心に立地し、そこを中心に墓域を形成する。米岡２遺跡も海岸線より伸びる沢を 300 mほど遡った場所に位置し、北から伸びる枝沢の起点がある。米岡４遺跡はワサビ谷地川の源流に位置し、石見牧場遺跡は青苗川の枝沢の源流部一帯にあるなど、すべて沢の起点に位置するという共通点が認められる。本遺跡の発掘区内にはそうした場所はないが、発掘区の西北西 120 mほど先に沢の起点があり（図Ⅱ－２参照）、そこが遺跡の本体部でもあったと捉えられよう。

奥尻島の遺跡といえば海洋資源や交易など海とのかかわりが重要視されがちであるが、今後は沢・水・森という視点も重要になってくるものと考えられる。

なお、青苗遺跡の縄文時代早期中葉に於いて、E地区では沢状地形に当時期の土器集中が検出された地点があり、同F地区では3つの沢状地形に合わせるように一つずつ計3基の石組遺構が認められている。本遺跡や前述の米岡4遺跡を含めた当時期は他の時代に較べ内陸の沢の起点とも言うべき場所に立地する遺跡・遺構の比率が高いという印象を受ける。このことについては、今後更に詳細な分布調査をして情報を集める必要があるが、古環境（道南地方へのブナ林の進出等）の問題も視野にいれて考える必要があるかもしれない。

## 参考文献


乾　哲也　1997「宮津弁天遺跡におけるオホーツク式土器の表採資料」
奥尻町編　1997「新奥尻町史」奥尻町
奥尻町教育委員会編　1968「奥尻町史」奥尻町教育委員会
木村　哲朗　1997「青苗遺跡（E地区）」奥尻町教育委員会
木村　哲朗　1997「青苗遺跡（F地区）」奥尻町教育委員会
木村　哲朗　1998「青苗B遺跡」奥尻町教育委員会
佐藤　忠雄　1978「奥尻島米岡第2遺跡」奥尻町教育委員会
佐藤　忠雄　1981「奥尻島東風泊遺跡」奥尻町教育委員会
佐藤　忠雄　1982「奥尻島松江遺跡」奥尻町教育委員会

図版（1）

発掘調査風景（1）

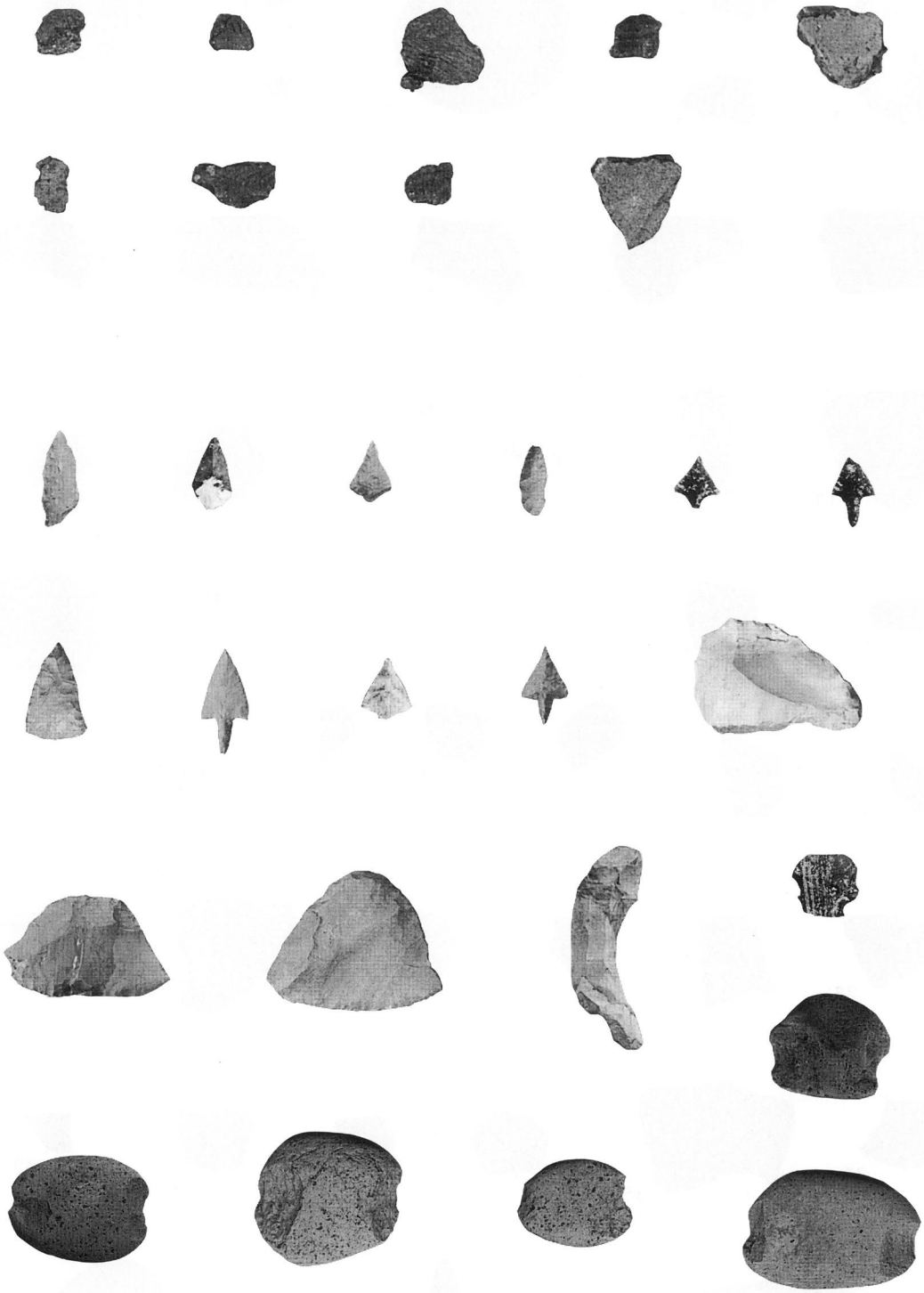
発掘調査風景（2）

図版（2）

旧石器確認調査状況

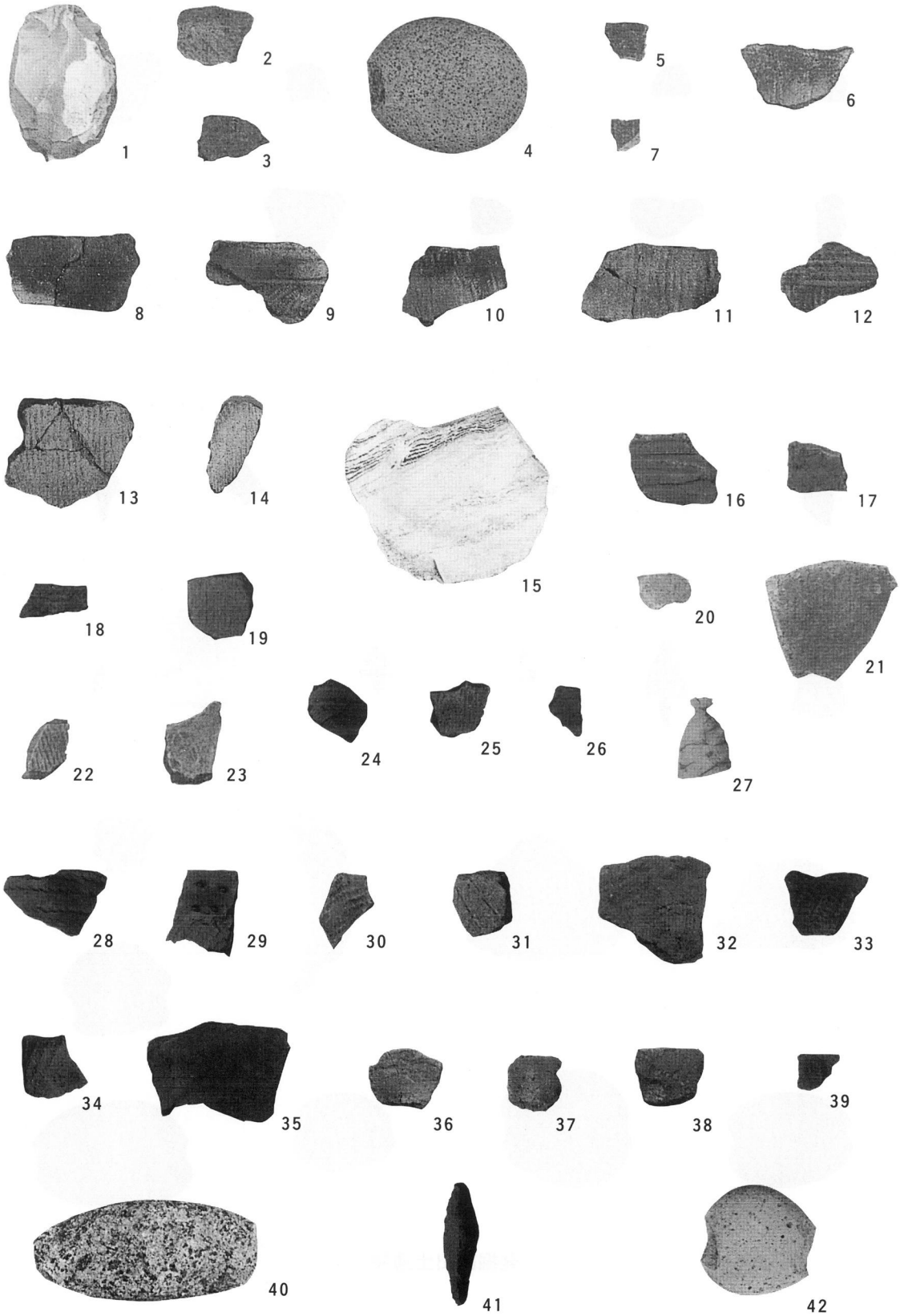
遺跡完掘状況

図版（3）



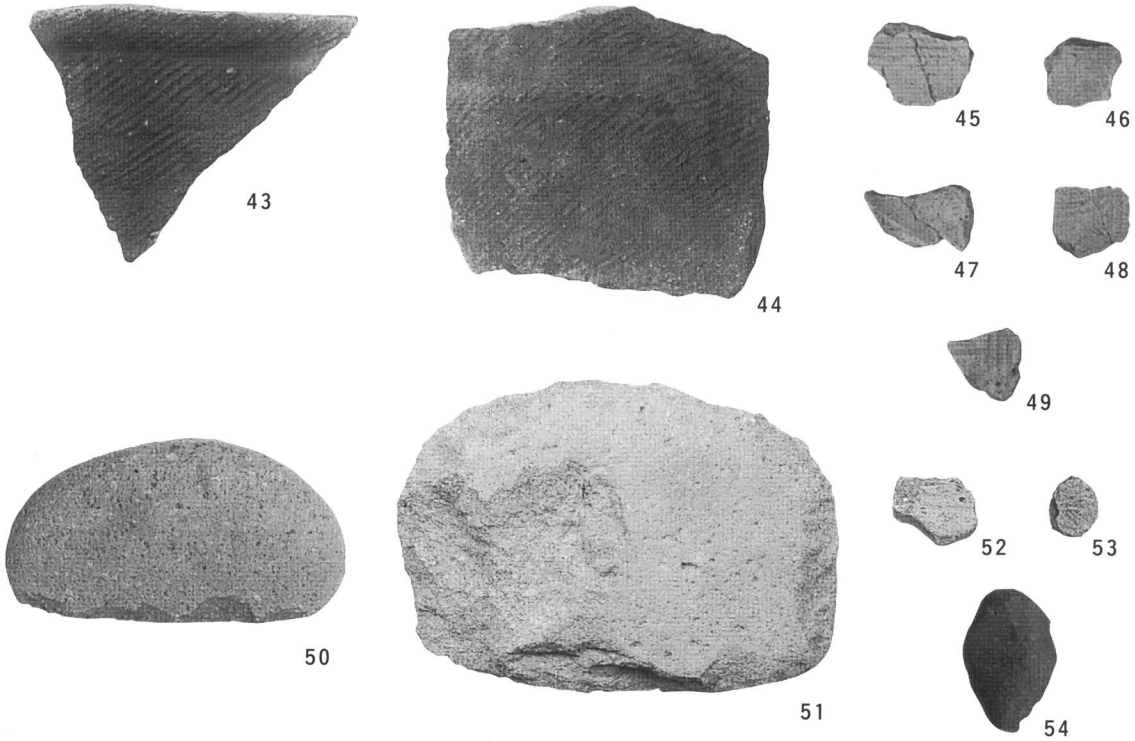
発掘区出土遺物

図版（4）




奥尻島内の縄文・続縄文時代の表採遺物（1）

図版（5）




奥尻島内の縄文・続縄文時代の表採遺物（2）

**砥石線遺跡**

～米岡奥尻空港線造成工事にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書～

2002年3月発行

発　行　奥尻町教育委員会
奥尻郡奥尻町字奥尻317番地地先
奥尻町海洋研修センター内
TEL 01397（2）3890

印　刷　㈱長門出版社　印刷部
北海道函館市日乃出町11番13号
TEL 0138（52）2461